三根精神の源流をたどる

―　「向陽の空とは？…校歌の歌詞を深読みする」補講

（令和 4 年 5 月 10 日　公文敏雄 35 回）

まえがき（土佐中魂について）

土佐中・高等学校同窓会報『向陽』第 22 号（令和 3 年 11 月）の誌上で　＜「向陽の空とは？」校歌の歌詞を深読みする＞　と題して校歌の解説を試みた。

ただ、補足したい点もあったので、本年 4 月 21 日開催の同窓会関東支部昼食会『筆山会』の場をお借りして補講させていただいた。その講話の内容を文章にし、時間の都合で語り残したことを書き加えたのが本稿である。

（敬称・敬語は原則として省かせていただきました。）

土佐中初代校長三根圓次郎
（『三根先生追悼誌』より）

土佐中学・高等学校校歌　（『土佐中學要覧』昭和 5 年 11 月より転載）

一　向陽の空淺緑　廣きぞ自が心なる
　　大洋の岸物榮ゆ　伸ぶるは我の力なり
　　嗚呼幸多き天と地　自然の啓示（さとし）かしこしや

二　（今は歌われていない）
　　誠忠剛武並びなく　靈夢に入るか護國の士
　　達識睿智（えいち）類（たぐい）なく　自由を唱ふ不死の人
　　嗚呼先賢に績（いさお）あり　三才秀で尊しや

三　（現在は二番）
　　孕灣頭軒高く　兼山碑下に庭清し
　　協力一致誓ひして　集ふ同袍意氣强し
　　嗚呼勉めよや竭（つく）せよや　冠する土佐の名に合（かな）へ

四　（今は歌われていない）
　　それ右文と尚武こそ　强者の競ふ榮冠ぞ
　　人道正義の理想こそ　王者の擔（にな）ふ使命なれ
　　嗚呼吾れ享けん不朽の名　奮へや土州健男兒

大正 11 年 5 月　教諭　越田三郎作歌（弘田龍太郎作曲）

１．校歌とは？（補足）

最初に、「校歌とは何か？」について、おさらいしておきたい。

土佐中建学の際、新学校設立の提唱者藤崎高知市長（当時）の腹心（助役）として創業の実務に奔走し、発足後も土佐中理事を長く務めた川島正伴（まさのり）氏が、「土佐中魂が残るところなく吐露されておる」のが校歌だとした（『川崎幾三郎翁傳』昭和 17 年刊より）ことは、同窓会報『向陽』で述べた。

では、「土佐中魂」に通じる 5 大方針「本校の特に留意する点」（『土佐中學要覧』昭和 5 年 11 月より）を列挙して、校歌の歌詞と対比してみよう。

① 個人指導に重きを置き → 「伸ぶるは我の力なり」（校歌一番）
② 天賦の能力を発揮し自発的修養に努め → 同上
③ 堅忍剛毅の性格・健実なる思想を養成し → 「誠忠剛武…護国の士、自由を唄ふ不死の人」（校歌原作二番）、「人道正義の理想」（原作四番）
④ 責任を重んじ好んで労に就く習慣を養ひ →「勉めよや竭せよや」（原作三番）
⑤ 運動を奨励し養護上の注意を怠らず →「それ右文と尚武こそ」（原作四番）

― 更に、建学の目的、「国家の翹望（ぎょうぼう）する人士の輩出」（「設立趣意書」）を承けて、校歌原作三番の結び「冠する土佐の名に合へ」がある。

「国家に望まれ、求められる人々」とは、校歌原作二番に登場する「護国の士」坂本龍馬や、「自由の人」板垣退助のような偉人に限らず、伝教大師最澄が説いた「一燈照隅、万燈照国」（各々その処を得て務めることが国のためになる）を支える、有名無名の人々だと考えたい。なお、「国家」を昔は「天下国家」とも言った。

２．三根精神の根っ子「国士的信念」とは

○ 三根圓次郎先生の略歴

「土佐中魂」を生んだ「三根精神」の源流をさぐるために、『三根先生追悼誌』の中に収められた『三根圓次郎先生略伝』から、先生の略歴を簡単にみておこう。

先生は明治 6（1873）年３月、長崎県西彼杵郡瀬戸田町樫浦郷（現西海市大瀬戸町）に旧大村藩の庄屋の末子として生まれた。

（大村氏といえば、天正遣欧使節団をローマに派遣した、第 12 代当主大村純忠がキリシタン大名として名高い。先生誕生のわずか 5 年前、戊辰戦争時の大村藩は、新政府軍に参加して各地で武功をあげた。）

地元の尋常小学校を抜群の成績で卒業した先生は、明治 19（1886）年、秀才教育を標榜する私立尋常大村中学校（5 年制）に進学する。

さらに、旧制熊本第五高等学校（現熊本大学）、東京帝国大学文科大学・哲学科（現東京大学文学部）を経て、明治 30（1897）年、教育界の第一歩を山形県立山形中学校教諭（担当：英語、修身）として踏み出した。

次いで、福岡県立東筑中学校、佐賀県立第三中学校（のち唐津中学校）校長、県立佐賀中学校校長、県立徳島中学校校長、県立山形中学校校長、県立新潟中学校校長を歴任する。

教育者としての経験を積んだ先生は、大正 9（1920）年、私立土佐中学校の初代校長に迎えられ、昭和 10（1935）年 3 月急逝されるまでの 15 年間にわたって、土佐中教育に文字通り身を捧げた。

○　先生の日常に見る「国士的信念」

『略伝』は、学業成績きわめて優秀であった先生が「学会思想界での華々しい名声を追うのではなく、敢えて極めて地味なる一教育家を目指した」理由について、「国士的信念牢固たるものありたるを以て」と伝えている。「国士」とは、「国家（世）のために身命をなげうって尽くす人物」（goo 辞書）とされるが、どんな人なのか？

先生の「国士的信念」を示すと思われる部分を、『三根先生追悼誌』に収められた、土佐中校長在任中（担当：修身、英語）の言動から拾ってみよう。

＜修身＞

「先生の修身の御講義並びに御訓話が千鈞の錘（おもり）となって肚裏に有るを覚える」と卒業生に言わしめたのだが、いったいどんな講義だったのか？

先生は、「教科書ばかりにかじりついてはいけない。」が持論であった。通算 8 年におよぶ佐賀県勤務も関係するのか、『葉隠』（佐賀鍋島藩武士の心得）をよく引き合いに出した。また、中国明末の処世・人間学書『菜根譚』を講義した。卒業生によれば、「例によって菜根譚、それから葉隠武士の講義」だったそうだ。

＜教育勅語＞

『教育勅語』奉読も生徒の印象に残った。「何か式がある時でも講堂に昇りまして勅語を読まれましたね。」と卒業生が回想している。

『教育勅語』の内容を読めば、天皇を中心に徳で一つになった家族のような国柄を称揚したものである。ちなみに、ご子息の流行歌手ディック・ミネの本名「徳一（と

くいち)」は、教育勅語の結び「咸（みな）其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾（こいねが）フ」に由来するのではないかといわれている（本人の証言資料は無い)。

「徳」とは「他のために自己の最善を尽くすこと」と筆者は教えられてきた。「国士」たる先生は、利他をことのほか重んじたのである。

＜敬愛する人物＞

先生は、敬愛する人物を校内講演会講師として招き、生徒に聴講させた。

嘉納治五郎（柔道家、第五高等学校校長)、山室軍平（キリスト教日本救世軍指導者)、本間俊平（実業家、「秋吉台の聖者」、救貧など社会事業)、長尾半平（土木技師として台湾で活躍、禁酒・麻薬中毒患者救済運動）らの諸氏だ（5 回生伊野部重一郎の回想)。

嘉納を除く 3 人はクリスチャンで、世のため人のために尽した「徳」の人である。偉人に接して、生き方・志を学んでほしかったのだと思われる。

＜挿話：誰を偉人と思うかね？＞

『追悼誌』にはこんなやりとりが載っている。

ある日のこと、先生は 4 年生寄宿寮生たちをご自分の舎宅に招き、茶菓でもてなしていた。やおら、「君たちは誰を偉人と思うか？」と先生が問いかけた。かしこまっていたからか、生徒たちからは返事が無い。すると、先生の口から「わたしは勝海舟を偉いと思う。」との言葉が出た。(7 回生芝純の回想)

偉いと思うわけの説明が無いまま、話はここで終わっているが、勝海舟については後の「４．三根精神の源流…」で触れる。

３．三根先生と「自由」

先生の「国士的信念」は、「自由を守ること」とまったく対立しなかった。いや、両者は一体だったと思われる。

土佐中教育の柱であった「天賦の能力を発揮し自発的修養に努めしむ」ためには、そして、「自学自習の気風や自治の精神」を育てるには、当然ながら自由な教育環境が大前提となるからだ。全体主義的な統制・掣肘とは相容れないのである。

＜マルクス主義＞

土佐中創立の 2 年後、大正 11（1922）年に日本共産党が設立され、階級闘争に勝利するためには暴力も許されるとするマルクス主義が、社会に疑問を持つ純粋な若者の間に浸透しはじめた。土佐中生の中にもこれに傾斜していく者が現われ、先生は非常

に心配された。「老いの身に左傾理論の書を求め、その方面の劇場（「築地小劇場」のこと）に足を運んで、それに打ち向かう青年の心を了得して、教育的解決を身を以て探り求めんとせられた」のである。

＜軍部＞

昭和に入ると軍部が台頭してきた。昭和 6（1931）年に満州事変が起き、翌年にはドイツでヒトラーが政権を握った。先生は、亡くなる直前（昭和 10 年）「独逸は恐ろしい国だ、今にみろヨーロッパを始め独逸に苦しめられる時が来るぞ。」と予言された。

＜挿話：「父を誇りに思います」＞

先生の令息ディック・ミネ（戦中～戦後の流行歌手）の文章「父（三根先生）の思い出」を、『平井康三郎、ディック・ミネ、ケーベル博士をめぐって―三根圓次郎先生とチャイコフスキー』（中城正堯 35 回著、向陽プレスクラブ刊）から引用させていただく。

＜自分の教育方針を頑として通した父は、文部省であれ軍人であれ、岩のごとく動じなかった。父は学校で「おはよう」と、だれにも帽子をとって挨拶するのが常だった。死の前日（昭和 10 年 3 月 17 日）のこと、軍部の将校（土佐中への配属将校）がこれ（挨拶）を敬礼にせよと迫ったが、父は、教育方針は変えぬと言い通した。腹を立てた将校は酒に酔って自宅に乗り込んできて、父と言い争った。この出来事が引き金となって、脳内出血を起こしたのであろう。

父の教育は今の時代にも立派に通用すると、私は父を誇りに思います＞。

４．三根精神の源流をたどる（先生の学生時代）

先生の「国士的信念」すなわち「三根精神」を育んだ環境はどのようなものだったか、その源流をたどってみよう。

（１）建学の息吹―私立尋常大村中学校

（現長崎県立大村高校、三根在籍：13 歳明治 19～24 年）

創立者大村純雄伯爵
（大村高校同窓会 HP より）

明治 17 年に創立された同校は、2 百年の伝統を誇る旧大村藩校「五教館」（ごこうかん）の流れを汲んだ後裔である。私財を投じた創立者大村純雄伯爵（写真）は、旧大村藩主の婿養子（島津家出身）である。このような背景もあって同校の誕生は中央でも注

目され、先生2年生時の明治20年には、文部大臣森有礼が授業を視察している。

3期生（開校3年目に入学）だった先生は、建学の息吹を全身で吸い込んだ。校是「両道不岐（＊）」のもと、文武の（または心身の）両道に励んだ青春の記憶は、のちのちまで消えることが無かったであろう。

（＊）「不岐」とは「一体」という意味

（参考資料：写真とも大村高校同窓会HP、『大村市史』第四巻近代編）

（２）すごい教授陣―熊本第五高等学校

（現国立熊本大学、三根在籍：18歳明治24～27年）

先生が郷里を出て入学した熊本五高は、旧制ナンバースクールの先駆けの一つで、一高に遅れることわずか1年、明治20年に設立されたばかりだったが、教授陣が凄かった。

入学当時の校長は講道館柔道の創設（明治15年）で知られ、のち高等師範学校長を務めた嘉納治五郎、修身教師は会津藩に人物ありとうたわれた秋月胤永（かずひさ）（悌次郎）、英語教師はラフカディオ・ハーン（のち東京帝国大学教授）である。

三根先生が通った頃の熊本五高、赤煉瓦の本館が記念館として現存（五高記念館HPより）

筆者は、三根先生の教育者志望は、このころ芽生えたのではないかと推察する。

○　校長：嘉納治五郎

（在任：30歳明治24年～26年、明治14年東京大学文学部政治学及理財学科卒）

嘉納は、柔道にとどまらず、学習院教授・教頭、高等師範学校（現筑波大学）校長、英語学校「弘文館」創立、「哲学館（井上円了設立、現東洋大学）」講師、などの多彩な業績にみられるように、明治期屈指の教育者である（写真）。

五高着任は、学習院を辞めての欧州教育事情視察旅行（1年4か月から帰国した直後だった。嘉納は草創期の五高で、医学部開設、校友会設立、教授陣の充実など、大胆に体制整備を進めながら、自らの信条「文武不岐」にもとづく全人教育に力を注いだ。

嘉納治五郎
（菊正宗酒造HPより）

（参考：熊本大学・五高記念館HP、日本柔道連盟HP）

＜挿話：嘉納治五郎父子と勝海舟の報恩＞

勝海舟
（ウィキペディアより）

幕末、海軍創設に奔走していた海舟は、文久 3（1863）年神戸に私塾「海軍塾」を開設、翌年には「海軍操練所」（坂本龍馬が塾頭）を設けた。

海舟は語録『氷川清話』の中で、「俺が神戸に行った時には、機械の類はみんなこの人に買ってもらったのだ。」と語っているが、「この人」とは嘉納治五郎の父親である。

治五郎の実家嘉納一族（現在の「菊正宗酒造」）は当時廻船業を併営しており、治五郎の父は海舟の活動の有力な支援者であった。「使用商人という立場を超越した深い交流があった」と伝えられている。（「菊正宗酒造」HP、以下同じ）

明治 22 年、学習院教頭となっていた治五郎は、華族優先を求める新任院長と衝突、辞任して（事実上の解任）欧州教育事情視察の旅に出ることとなる。出発の直前、失意の治五郎は師と仰ぐ勝海舟を訪ね、「欧州での見聞をもとに学問に没頭したい」と告げた。海舟はそれを一蹴、「それはいけない。社会で事をなしつつ、学問を成すべきだ。」と諭したという。海舟の銘「鎮国利人」＝国家のため人のため　の書が熊谷市に残っている。

9 歳で母と死別、4 年前に父をも亡くした治五郎を親身に気遣っていた海舟は、治五郎の結婚にも関わる。欧州から帰国した明治 24 年、治五郎（30 歳）が慌ただしく娶った相手は、海舟から紹介された漢学者竹添新一郎の息女である。

三根校長は、恩師嘉納治五郎を土佐中講演会に招くなど（前述）浅からぬ交際があったので、海舟の報恩ばなしを嘉納から聞かされて、感銘を受けたかもしれない。

○　漢文・修身：教授　秋月胤永（かずひさ）
（本名悌次郎、在任：66 歳明治 23～28 年）

秋月胤永
（五高記念館 HP より）

漢文・修身を担当した秋月胤永は、会津日新館生徒時代から抜群の学才を顕わし、藩の給付生として江戸の昌平黌（儒官佐藤一斎）に進んで奮励刻苦、舎長（書生寮長）まで任された。幕末には藩主松平容保を支えて重責を担い、戊辰戦争においては会津城明け渡しの交渉役・降使を務めた。（対峙した官軍参謀は板垣退助）

維新政府により終身禁固刑を課されたが、ほどなく特赦で新政府に出仕ののち教育者に転じ、第一高等中学校（現東大教養学部）教諭などを経て五高教授となる。

秋月は人格高潔、学徳兼備、厳にして寛、五高教師のリーダー的存在で、同僚や生徒に尊敬され慕われた。古武士の風格を湛えた彼を、同僚ラフカディオ･ハーンは「先生は慈父のようである」と評して敬愛した。

発奮を促す熱血の修身講義に生徒は涙し、漢詩を能くする秋月による、学校行事の際の「教育勅語」（＊）奉読は五高の定例となった。（三根校長が土佐中で施した修身教育には、秋月流の趣がある。）
秋月の教え「剛毅木訥近仁」（論語の句）は爾来五高の精神基礎となった。

（＊）『教育勅語』は、文明開化が生んだ西洋化一辺倒の弊害を憂慮された明治天皇の御意により侍講元田永孚（ながざね）らが起草した、仁義忠孝の国民道徳規範。明治 23 年の発布で、前年の大日本帝国憲法発布ともども、教育に関わる重要事件だった。

（参考：熊本大学・五高記念館 HP、『落花は枝に還らずとも－秋月悌次郎』中村彰彦）

○　**英語**：教授　ラフカディオ・ハーン
（小泉八雲、在任：41 歳明治 24～27 年）

熊本大学構内の
ハーンのレリーフ

『怪談』など日本の民俗・文化に関する数々の著作で知られるギリシャ系英国（アイルランド）人ラフカディオ・ハーンは、明治 23（1890）年 40 歳で来日、島根県尋常中学校（松江）に 14 か月勤務ののち、英語を重視する嘉納校長の招きで熊本五高に着任した。

ハーンは、国情に合わない官製の教材、技量を欠く外国人教師の横行に憤慨しながら、生徒の想像力と個性を伸ばすことに注力、教科書を離れて、聞き取り・発声・書き取り、身近なものを素材とした英作文指導（丁寧に添削）、質疑応答・対話…等々の授業で生徒を惹きつけた。
また、教え子の健康や職業まで親身に気遣った愛の教育者でもあった。

その後東京帝大英文科に転じて、詩人上田敏、土井晩翠ほか多数の人材を育てたハーンは「彼を凌駕する外人教師なし」（平川祐弘東大名誉教授）と評されている。

（参考：『教育者としての小泉八雲』高瀬彰典、『ラフカディオ・ハーンの英語教育』富山大学附属図書館ヘルン文庫）

五高における 3 人の名伯楽の教えは、後年、三根先生が英語、修身の教師、更に校長として県立中学で経歴を積むうえで、貴重な糧となったに違いない。

なお、先生の卒業と入れ替わるように、夏目漱石（ハーンの後任教師）と寺田寅彦（生徒）が五高の門をくぐった。二人の師弟関係は東京帝国大学時代にも続く。

（３）「韋陀を講ずる博士あり」―東京帝国大学文科大学 哲学科

（現東京大学文学部、在籍：21 歳明治 27～30 年）

「永き日や韋陀（いだ）を講ずる博士あり」は夏目漱石の句である。「韋陀」はヒンドゥー教・仏教の護法神で、「博士」は井上哲次郎教授、「永き日」は春の季語。漱石は明治 23 年から 26 年まで帝国大学文科大学（のち東京帝大）英文学科に在籍、哲学講義も聴講した。当時の帝大生は文科全体でも 1 学年百人そこそこだったから（哲学科は三根先生 3 年同期で 16 人、「東京帝国大学一覧」より）、俳句のような授業風景が見られたであろう。

三根先生も漱石もくぐった赤門
現在重要文化財（東大 HP より）

熊本五高で明治前半期を代表する巨人たちの薫陶を受けた三根先生は、27 年、高等教育界への登竜門であった東京帝国大学文科大学（哲学科）に進む。三根先生が学んだ 3 人の人物を紹介したい。

○　教授；井上哲次郎　（東洋哲学・哲学史、在任：34 歳明治 23～大正 12 年）

東京大学文学部哲学及政治学科でフェノロサに学び、明治 13（1880 年に卒業した学部一期生である。文学部助教授を経てドイツに 6 年間留学、カント、ショーペンハウエル、ヘーゲルなどの観念論哲学（いわゆる「デカンショ」）、英国人 H. スペンサーの自由主義・進化論哲学、インド哲学などを学んだ。23 年に帰国し 34 歳にして日本人初の哲学科教授となった。

主著に『日本道徳論』（明治 20 年）、『勅語衍義』＝教育勅語（＊）の解説（明治 24 年）、『日本陽明学派之哲学（＊＊）』（明治 33 年）などがある。

井上哲次郎
（ウィキペディアより）

（＊）『教育勅語』については、熊本五校の秋月胤永（かずひさ）の項をご参照されたい。井上による解説書作成は当時の国策（文部大臣の要請）によるものであった。

（＊＊）「陽明学」は、明国の学者・高官 王陽明による儒教改革（朱子学批判）で、彼の語録『伝習録』が江戸期に広く読まれた。性善説に基く「致良知」（自己実現）、知行合一（実践）の教えが、幕末・維新期の学者・活動家（大塩平八郎、佐久間象山、西郷隆盛ら）を力づけた。

東西思想対立期（明治 20 年代）に再評価されはじめ、井上も講義で触れた。井上の門下生西田幾多郎（明治 27 年卒、著書『善の研究』）（＊＊＊）や、内村鑑三（著書『代表的日本人』）への影響はよく知られている。

教育界にとっては、生徒の良き個性（良知）を伸ばすという自由教育を後押しする思想であり、三根先生も勉強したと思われる。

（＊＊＊）学生の必読書といわれた『善の研究』明治 44（1911）年刊の一節を紹介する。

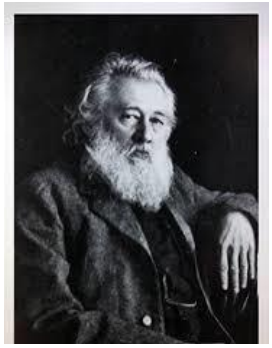
「善とは自己の発展完成 self- realization である。…竹は竹、松は松と各自天賦を充分に発揮するように…天性自然を発揮するのが人間の善である」。

ちなみに、米国の心理学者マズローが「欲求 5 段階説」を発表、最終・最上の欲求は「自己実現（self-actualization）」であるとして注目を集めたのは、ずっと後の 1943 年である。

（参考：東京大学哲学研究室 HP、『明治哲学界の回顧』・『教育勅語衍義；釈明』井上哲次郎、『井上哲次郎の開拓者的意義』井上円了、ウィキペディア）

○　教授：ラファエル・フォン・ケーベル

（西洋哲学・美学、在任：45 歳明治 26～大正 3 年）



ケーベル博士
（ウィキペディアより）

ドイツ人の父とロシア人の母を持つドイツ系ロシア人。モスクワ音楽院ピアノ科を卒業後ドイツに移って哲学を学び、ハイデルブルグ大学で博士号を取得のうえ教壇に立っていたが、明治 26（1893）年 45 歳の時、友人の勧めで来日した。東京帝国大学の哲学科教授のほか、東京音楽学校（現東京芸大）でピアノ講師を務めた。

その 1 年後に三根が入学、ケーベルから（西洋）哲学概論・哲学史、美学・美術史を学んだ。

ケーベルの授業は、演壇での講義が得手でなく、訛りの強い英語に加え、ドイツ語はまだしも、ラテン語・ギリシャ語の多用が妨げとなって、ほとんどの生徒にとって理解が困難だったといわれる。語学が得意だった三根先生でも、苦闘せざるを得なかったのではないだろうか。ケーベルを「先生」と仰ぎ、三根先生に続いて大正期に活躍した哲学者・教育者に、安倍能成、阿部次郎、和辻哲郎らがいる。

前出の西田幾多郎は、「ケーベル先生の崇高な人格と風姿に憧れて、という学問らしくない願いから哲学科に転じた」と打ち明けている（『思想』ケーベル先生追悼号大正 12 年 8 月）。

バイオリン好きの寺田寅彦は、演奏会でピアノを弾くケーベルに魅了されて、理科大学 1 年（明治 32 年）の夏休みに彼の自宅を訪ね、以来、夏目漱石を誘ってたびたびケーベルの出演するコンサートに出かけた（随筆『24 年前』）。

音楽をこよなく愛し、「古典を読みたまえ。」と口うるさかったケーベル博士は、学者・教授というよりは、「芸術、教養の人」だったという印象が強い。

（参考：『平井康三郎、ディック・ミネ、ケーベル博士をめぐって―三根圓次郎先生とチャイコフスキー』中城正堯 35 回著、向陽プレスクラブ 2017 年 3 月刊。『「大正教養主義の起源」東京帝国大学教師ラファエル・フォン・　ケーベルと学生たち』松井健人）

○　野尻　精一

（高等師範学校教授、文科大学哲学科教育学講師―在任：30 歳明治 23～30 年）

講師 野尻精一は、明治 15 年に東京師範学校（高等師範学校の前身）を卒業、文部省御用掛、県立山形師範学校長を経てドイツに 3 年間留学、22 年に帰国して高等師範学校教授となっていた。

当時の文科大学は、教育界への重要な人材供給元だったにもかかわらず教育学科がなく（明治 43 年になって哲学科内の専修学科として設置）、中等教育機関教員養成を目的とする高等師範学校（現筑波大学、当時の校長嘉納治五郎）から講師を招いた。

野尻精一
（ウィキペディアより）

野尻が文科大学で講じたのはドイツ留学中に学んだ「ヘルバルト教育法」である。これは、教育の目的を徳育（倫理・道徳教育）とし、手段を教授・訓練・管理に分類した。「管理」の意義を、野尻の同僚で後任講師大瀬甚太郎（前熊本五高教授）は「養護」と「体育」とに分けて説明している。当時は粗末な食事と過労で結核など病に冒される学生・生徒が多く、健康管理は極めて切実であった。

（『土佐中學要覧』も「本校の特に留意する点―運動を奨励し養護上の注意を怠らず…」としている。）

（参考：東京大学 HP「文学部の歴史」、『西洋教育思想の移入と実践』田中克佳、『日本体育大学紀要 2009 明治期における教育学の一領域としての体育学』佐野昌行）

４．大正新教育運動と教育者三根先生

三根先生が大学を出た明治 30 年以降、ヘルバルト教育法は個人主義的と批判されて衰退し、国家・社会の維持繁栄を目的とする「国家的（社会的）教育学」が取って代わる。一方では、生徒の自発的活動・自学自習を重視する「自由主義的教育運動」が抬頭して大正期の「新教育運動」に発展、三根もその影響を受けた。

三根先生と教育思想を同じくした同志に、高知県出身で、明治 42 年東京府立第一中学（現都立日比谷高校）校長に就任した川田正澂（まさずみ）がいた。

同志 川田正澂
（ウィキペディアより ）

川田は大正 2 年から 1 年 2 か月にわたる欧米教育事情視察に派遣され、「生徒の自主性と想像力を重んずる」英国イートン・スクール（＊）に感激して帰国する。意気投合した二人の校長は、手を携えて大正時代の中学教育界をリードしていく。

なお、川田は後年、自分の後継者にとすら考えていた三根の土佐中校長就任にも関わり、何かと助言したという。

（向陽プレスクラブ刊『土佐中學を創った人々―土佐中学創立基本資料集』解説＝中城正堯記）より）。

（＊）イートンは英国のパブリック・スクール。筆者が土佐中学 3 年のころ（昭和 32 年）だったか、夏休み前に学校から副読本（課題図書）として『自由と規律』池田 潔著が配られ、英国の学校生活の模様を興味深く読んだ覚えがある。やや黄ばんだ岩波新書がまだ本棚に残っている。

５．土佐中教育（「特に留意する点」）の原型　―「十項目」

令和 2 年 10 月 29 日、三根が奉職した県立山形中学校の後身「県立山形東高等学校」（山形市）が創立 136 周年を迎えた。その記念式典祝辞で校長がこう語った。

＜…大正元年に本校に着任した 第十六代三根校長（在任～大正 7 年）は、十項目の教育方針（＊）を掲げており、その一つに「質実剛健の気風の養成」がありました。なお、その他…「世界的な視野」、「科学的研究心」、「独 創的発明的精神」など、現代においても育成すべき資質として重要視されているものが含 まれていたことは注目に値します。

大正時代の本校は…大正デモクラシーを背景として、 秩序ある自由主義の校風が形成されたと評されています。私は今後もこの校風は是非継承 していくべきものであると考えております。…＞（山形東高校 HP より）

（＊）「十項目の教育方針」とは、大正 5（1916）年に「有志全国校長会」（会長三根校長）がまとめたもので、翌年『共同会雑誌』に「中学教育上戦後特に注意すべき事項」（戦後＝第一次世界大戦後）として掲載された。祝辞で紹介された 4 項目のほか、「愛国心の涵養」、「進取・自主独立の精神」、「体育の奨励」、「道徳上の信念」、「倹約の風」、「立憲的思想」などが並んでいる。
（『山形東高等学校百年史』より）

なお、『山形東高等学校百年史』は、「三根校長の教育方針は質実剛健の気風の中に自由闊達の精神を生徒に教えた。」とし、三根校長による週一回の修身授業は厳粛そのもので、生徒は「この訓育に多くの感銘を受けた。」と伝えている。

同校ホームページを開くと、「文武両道・質実剛健・自学自習」の標語が目に飛び込んできた。北国に、100 年の時を経て三根精神の息づいている場所があった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

エピローグ

大正 9 年創立の土佐中学は、「三根校長の方針で」他校に先駆けて音楽を正課とした。更に、「ビクターの大型蓄音器や高価な外国のレコードが沢山あり、マンドリンクラブやハーモニカクラブの盛大な活動があり、間もなくグランドピアノまで備えた」という。こんな中学は全国広しといえども類を見なかった。

4 年に在学中に向陽寮歌を作り、卒業後東京音楽学校に進学して作曲家となった平井康三郎（5 回生）は、「仲秋の名月となれば誰かが遠くで吹く笛の音が冴々（さえざえ）と心にひびき…N 君は押し入れでギターを奏で、ハーモニカ狂だった私も押し入れでプカプカやっていた。」と往時の寮生活を懐かしんでいる。

（『土佐中創立 40 年誌』より）

天上のケーベル博士もさだめし驚いたことであろう。

おわり